

個性輝く愛晃会文化賞

愛晃会文化賞審査委員長

田 近 洵 一

東京学芸大学名誉教授

元早稲田大学教授

総評

愛晃会文化賞は、中学生から高校生までの自由応募による作品の中から、特に優れた作品を文化賞として表彰するものですが、このような賞は晃華学園独自のものです。しかも、文化賞に選ばれた作品は、いずれもきわめてレベルの高いものです。

私は、毎年、この素晴らしい文化賞の最終審査に参加し、晃華学園の皆さんの作品を読ませていただくのが、とても楽しみです。それは、若い感性にあふれた優れた作品と出会うことができるからです。

今年も、たくさんの個性豊かな作品を読ませていただきました。

しっかりとものを見つめた生活や紀行の記録、鋭く問題をとらえて考えを深めていったエッセイや論文、若い世代の生き方を想像豊かに描き出した小説、資料をふまえて情報を収集し、考察を深めた研究論文……など、入選作品は、いずれも人真似ではない、その作者らしい個性的な作品だったように思います。

私は、最終審査に残った作品を読ませていただきながら、こんな文化賞のある晃華学園っていいなあと思いました。審査委員長として言わせていただくのですが、晃華学園の皆さん、このような文化賞のある学校のことを誇りに思っていると思います。そして、来年も、出来るだけ多くの方がこの賞に応じ、皆さんでこの賞を盛り上げていってほしいと思います。

作品評

愛晃会賞（最優秀賞）

M・O「私の家族の心のオアシス 玉川上水の過去と現在」（研究論文、中2）

自分や家族にとって親しい玉川上水について丹念に調べ上げてまとめた文章で、素朴ながらも、真実みのある研究報告文になっています。筆者は、まず、玉川兄弟によって造られ、その後、様々に拡大、開発されてきた玉川上水の、かなりぼう大な過去の歴史について資料で丹念に調べ、それを整理して要領よくまとめています。ここまでは、文献資料による調査ですが、筆者はさらに父親の協力を得て、羽村の取水堰から新宿に到る玉川上水の現在の様子を実地に踏査して、上水を通すという作業が如何に壮大な規模のものであったかを調べてあげています。そして、実地に調べたことを、地図や写真によって、現在それがどうなっているか、具体的に示してくれています。

以上のような、資料と実地踏査による調査を、正確を期して行った努力と、丁寧な整理と分かりやすい文章とによって、玉川上水をめぐり、人々がどのような苦勞をしてきたかがよく分かるように書き記されています。

審査委員長賞

I・W「つれづれなるままにイーハトーブの夏」（紀行文、中2）

作者は、「イーハトーブの旅」と名付けた家族旅行で岩手県をたずね、宮沢賢治ゆかりの地をたどりながら、小岩井農場や岩手山など、賢治作品のモチーフとなった東北の自然に直接接触するとともに、そこから想像を自由にひろげ、自分の内にイメージの世界を拓けていきます。その点で、この作品は、旅行記ではありますが、東北旅行を通してのイメージ体験を記したものと言ってもいいでしょう。特に、夜明け前の、閃光と雷鳴の中の岩手山は、作者の内なる恐怖の山です。また作者は、賢治記念館をたずね、賢治の心象世界をイメージしながら、「銀河鉄道の夜」の作品世界を生き生きと思い描きます。記念館の中の展示と重ねながら、賢治の童話世界を間接体験しているのです。そして、最後に、宮沢賢治の上に思いを重ね、賢治作品の中の「ほんとうのさいわい」とは自分にとって何だろうかと考えます。この作品は、岩手の自然の中で、賢治童話の世界をイメージとして思い描きながら、その心に触れた間接体験の旅行記として、中学生時代の貴重な記録となるものだと思います。

優秀賞

R・F「アメリカを旅して」（紀行文、中2）

家族での二週間のアメリカ旅行で出会ったこと、特に印象に残ったことに重点を置いて書き留めた旅行記で、初めてのアメリカ旅行のいい記録になっています。海外旅行の記録としては、めずらしいことやおもしろいこと、初めて知ったことや驚いたことなどを書いておくのが基本ですが、特に日本との違いや、日本では考えられないこと、そして外国に来て改めて考えさせられたことなどを書いておくことが大事です。その点で、この福田さんの文章も、日本では体験できないことを中心に、アメリカで初めて見たことや体験したことを、しっかりと書き留めています。富裕な街の中の貧困の風景、街で声を掛けてくれるフレンドリーな人たち、身障者やお年寄りへの配慮、自由な雰囲気ของบริษัท、自由だが同時に危うい雰囲気の街……など、日本とは感覚の違うところをしっかりと見て書いています。いつかまた外国に行くことがあったら、日本との違いをふまえて、さらにそれがどのような感覚や考え方などの違いから来ているか、またどのような独自の文化を創り出しているかなどまで考えるようにするといいと思います。

優秀賞

H・F「七夕の日に」（小説、中2）

この作品は、幼なじみの少年と少女とが、互いの想いをそれぞれの視点で語る形で展開します。二人は、八年前、家の近くの「山」でいっしょに天の川を見たことを思い出し、それぞれで「山」に登り、そこで思いがけず再会し、互いに「あの星空」が忘れられずにここに来たことを知ります。それからさらに一年、少年が引っ越すことになったとき、二人はまた「山」に登り、織姫と彦星のようにこれからもここで会うことを約束します。この作品は、このような幼なじみの少年と少女との互いに想いを寄せ合う姿を、織姫と彦星との天の川の伝説に託して描いた、言うならば美しい初恋の物語です。

少年と少女との恋の物語を語りながら、この作品は、歯の浮くような、わざとらしい、甘い恋愛小説にはなっていません。それは、二人の物語の中心部分をプロローグとエピローグとで挟むという形で、作品の構成がしっかりしているからであり、また、互いに相手を思い合う心の動きが、それぞれの視点で、丁寧に、そして素直に描かれているからです。少年少女期の異性への優しい想いを描いた中学二年生の創作として、レベルも高く、好感の持てる作品です。

【高一・海外研修の記録】

今年度の「海外研修記」には、ホームステイを中心とした紀行文としても、また語学研修の記録文としても優れたものが多く、「メープル賞」は本田安珠さんと友咲乃さんの二人ということになりました。

メープル賞

A・H「まだ終わらない、終われない」（高1）

カナダでの二週間に及ぶ語学研修の体験を、ホストマザーとのことを中心に描いていて、実感に満ちた記録となっています。記録としては、毎日の出来事をただ日記のように書き留めるのではなく、二週間の研修を通して、うれしかったこと、心に残ったことに焦点化し、エピソードごとに「緑色の優しい目」「謝らなくていいよ」「友達になってくれて、ありがとう」「怒ってくれて、ありがとう」……など、魅力的な小さなタイトルを付けて、具体的に描きだしています。特に、自分の英語に自信をなくしている時に、ホストマザーが優しい笑顔で自信をくれたこと、そのマザーが日本の文化を大切に思ってくれていることを知ったこと、そして苦しいくらいのビッグハグ……など、語学研修を越えて、そこに温かな人の心や人間的な出会いを感じていることが、具体的な事実として描かれており、真実みのある記録となっています。最後の「あなたが一番」で、自分が一番言いたいことが最後まで言えなかったことをきちんと書き記しているところ、筆者の誠実な人柄がうかがわれます

メープル賞

S・T「カナダ語学研修 体験記」（高1）

ホストファミリーとの連絡、そして出会いから、最後の別れまでの毎日を、印象に残ったことを中心に、事実と体験に即して書き記しています。特に、毎日の生活の中で、英語をどのように使ったか、英語を学ぶことの意味をどのように実感したかが具体的に書き留められていて、語学研修としての充実した生活ぶりがうかがえると同時に、誰にとっても参考になるような価値のある研修記録文となっています。具体的な場面で言いますと、最初は「話しかけられずに終わってしまった」けれど、何日かすると、日本からのお土産について「電子辞書を片手に必死で説明」したり、ナイアガラの滝のところでは「勇気を出して」「……I want to see Niagara Fall more.」と訴えたり、……この筆者らしい英語体験をしています。しかも、ただの二週間のステイだけれど、そこで様々なカナダの生活と出会い、カナダの文化を身をもって体験しています。「世界は大胆で、大雑把で、ワイルドだ」と実感したり、「レディーが先」を体験したり、この語学研修記は、異文化体験記としても、おもしろくて価値のある記録文になっています。